

---

**我が道突き進む！スパイラルなんだとっ！？……突き進める自信をなくしたとです。**

Star Dust

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我が道突き進む！スパイラルなんだとっ！？……突き進める自信をなくしたとです。

### 【Nコード】

N2848BA

### 【作者名】

Star Dust

### 【あらすじ】

管理局の窓際部署、「地域安全課」。  
市民にはあまり知られてない部署である。

その部署の管轄に、更なる窓際部署がある。  
そこは“派出所”、またの名を“交番”と呼ぶ。

その派出所に何気なく勤務する男のもとに突然、人が来た。

それは、機動六課への勧誘だった

交番勤務に機動六課の勧誘が本格的に始まったようです。(前書き)

どうも、作者のStar Dustです。

一応活動報告にプロローグ以前の物語を書いていますのでそちらも見ていただければと思います。

わからない単語とかあったら教えてやってください。

一応、わからなさそうな単語は纏めて後書きに書きますのでわからなかったら一旦そちらを見てやってください。

交番勤務に機動六課の勧誘が本格的に始まったようです。

「これは罠だ！」

これは機動六課が俺を陥れる為に仕組んだ罠だ！」

「うるさいぞ」

黙れワーカーホリック予備軍。

そんなんだから去年の冬にガンになるんだよ。

23でガンとかどんだけ早いんだよ。

「その事はもういいだろう!？」

手術でガンは摘出されたしもうガンにはならない!」

「おいおいあ、ガンは風邪とは違うんだぞあ？」

ガンは転移するしなあ」

常識を知らん人間はこれだから。恥を知れ。

常識を知る人間もこの場にはいるが、喋り方が気に喰わん。そこま  
で気にしないけど。

「兄貴！機動六課の勧誘があつたって本当ですか!？」

おー、トーマス。

「おはよー」。

本当だぜ？これ読みな」

トーマスが書類を読み漁ってる間にトーマスを紹介しよう。

俺の名前が出てない？  
解せぬ。

彼の名はトーマス・エルビス。

彼は今年16になったばかりの青年だ。

そして俺のことを“兄貴”と呼ぶ。

何でも、彼が13の時に起きた人質事件の被害者だった彼は何を血迷ったか、その時その事件を解決に導いた俺に憧れたんだとか。

因みに俺はその時辺りから交番勤務だった。

時にして3年。

短いものである。

「あ、兄貴！

これスゴいつすよ！

行った方が良いつす！」

「良くないわ！」

エースやエリート達に埋もれるのが目に見えてわかる。

それだったら仕事も楽で給料も悪くないな派出所勤務の方が良い。

「行きたいならお前にそれくれてやるよ」

さてと、そろそろパトロールに出掛けるとすつか！

「暇っすねー」

「ソーだなー」

アイスが美味い。

やはりアイスはチョコに限る。  
つか甘味だったら何でも良い。

「午後はどうするっすか？」

「ガキ共のベースボールに参加する」

ガキってこんなときに使えるんだよな。

余りガキは得意じゃなかったが、今では嫌いじゃない。  
ここら辺は大人でも遊びにも入れてくれる心優しいガキ共ばかりだ。

「じゃ、俺もそうするっす。

野球楽しいっすもんね？」

「ベリーベリーファン」

今日も大人気ない真似でもするか。

「あ、あの、本局執務官のフェイト・T・ハラオウンです。  
あなたが、三雲誠陸曹ですね？」

「そうだけど、話なら後にしてくれる？」

今大事な局面だから」

4回裏2アウト2ストライクノーボール。  
ファーストとサードにランナーを置きつつも、両者共に得点はまだ  
0だ。

「今日こそおっさんから三振取ってやる！」

コラコラ、指差すな。失礼だろうが。  
と言ってやりたいが、そんな余裕はない。

「おりゃっ!!」

ボールはバットに叩きつけられて弾き飛ばされた。  
おっ、これはでかい。

「よっしゃ!ホームランだぜ!!」

子供相手にムキになってホームラン打って喜ぶとかすげえ大人気な  
い。そこが俺なんだが。

ホームラン打った後にダイヤモンドの四隅を回るのは気持ちよくて  
仕方がない。

「さて、仕事に戻りましょう?  
ここではなんですから、派出所で話をしましょう」

「おい、オメーら!

用事が出来たから俺は派出所に戻るぜ!

行くぞ、トーマス」



「へ、へい兄貴！」

交番には奥に休憩室がある。

第97世界“地球”にある畳が敷き詰められている部屋だ。

ここはそこまで広くないけど。

そんなところに茶色の陸士部隊の制服を身に纏った金髪の女性と大  
人気ない男が、机を挟んで座っている。

「粗茶ですが」

この沈黙を破ろうと言わんばかりのタイミングでジジイが入ってくる。

粗茶だが俺の実家の茶葉だぞ。

「あつ、すみません。」

ありがとうございます」

「どーも」

去らばクソジジイ。

一生奥さんの尻に敷かれてな。

「改めて、本局執務官のフェイト・T・ハラオウンです。」

あなたに昨日書類を送ったのですが……読んでいただけましたか？」

「あれ？」

欲しがってたしトーマスにあげたなー。  
なー、トーマスー？」

遠くからデカイ声で「はい！もらったっす！」と返事してきたのを聞いて、執務官様は頭を抱えてため息を吐いた。

「トーマスは機動六課にも興味あったし、何より入りたがってました。

普通はそんなヤローが行くもんでしょう？

部長ー棚の中にお焼きありませんでしたっけー？」

「そこの煎餅で我慢しろー」

チツ、この煎餅固いんだよな。固すぎて好きじゃない。  
つくづく使えないジジイだ。

「トーマスさん、一旦彼に書類を返してください」

「あ、はいっすー！」

なに普通に渡してんだよ。

そんなに機動六課に行つてほしいのかよ。

「「はい（っす）」

「謀つたなっ!？」

これが孔明の罠。

つか孔明パネエ。

「とりあえず、これを見てください。」

部隊長には八神はやて二等陸佐。分隊長に私と高町なのは一等空尉」

眠い。

欠伸が止まらない。

そして美人に睨まれるのは心が痛む。

「この部隊の後見人は」

長い。

これが噂のマシガントークか。  
茶々を入れる暇すらなかった。

「さて、あなたが選ばれた理由を教えようか」

「入る気ないんでいいです。」

誰かコーヒーない？」

「ない」

ないようだ。

てかなんか入る前提で話を進められてる希ガス。

「貴方の経歴書を見た結果です。」

2級教導官に執務官、デバイスマイスター……その他にもありますが、これだけの資格があるのにそれを上手く使わないのは、正直勿体無い」

ふむ。

「だから、貴方には機動六課に来ていただきたいのです」

「いくら言われても興味ないんで。とにかくお帰り下さい。つか帰れ」

俺をエリートばかりの新部隊に入れるとか頭がおかしいんじゃないかあるまいか。  
仕事サボってガキ共と遊んでるしな。

「執務官様も見たでしょう？  
俺がガキと楽しく遊んでるの。  
それが仕事中唯一の至福の時なんですよ。  
それは外せない」

嘘である。

ガキはあまり好きじゃない。  
昔は嫌いだったが、遊んでるうちにそうでもなくなってきたが。

単に新部隊に入るのが嫌なだけである。

「でも、良いですよね。  
子供達がいじめとがなく遊んでいる」

「そうですね。」

この辺のガキ共は心優しい奴等ばかりですから」

「あんなに幸せそうに皆で遊んでいるところなんて、見たことない……」

「部長ー？煎餅なくなりましたー」

「我慢しろー」

F a c k e n ジジイ！

……英語は得意じゃなかったのを忘れてた。合ってる保証がない。そしてわざと空気を読もうとしない俺。さっさと帰っていただけだ。

「時間も時間なので、そろそろ失礼します」

k t k r w w w

さっさと帰れ。そして二度と来るな。

「明日も来るので、そのつもりでよろしくお願いします」

まさかの死の宣告だった。

交番勤務に機動六課の勧誘が本格的に始まったようです。(後書き)

派出所(交番)

町の部分部分にある時空管理局の所轄署の分裂したもの。規模は小さい。

地球にある交番とあまり変わらない。

因みに所轄署は陸士第 部隊の考えでおk。

付近で事件・災害が起きた時はいち早く現場に駆けつけて事の解決にあたる。

交番勤務が提督に土下座をさせたようです。(前書き)

2話目を投稿したところで思ったこと事がありました。

……タグ少なくなね？

実際、何つけようか思い浮かばないんですよ。

「こんな良いんじゃない？」と思ってくれたら教えてやってほしいです。喜びます。作者が。

今回は恐らくわからなさそうな単語は無さそうなので後書きはないでしょう。

何かわからない単語があったら気軽に聞いてやってください。

交番勤務が提督に土下座をさせたようです。

1週間位経った。

あれから毎日毎日勧誘に来るのだ。

ハラオウン執務官以外にも高町教導官やら八神特別捜査官やらが来てた。

全て丁寧な断ってきたが、恐ろしくなるほどに勧誘を止めないのでストレスの限界に近い。

つかまず3人で来いや。

話はそれからだ。

「ねむ……」

今日は本隊の部隊長に呼ばれたので来た。ただそれだけ。帰ったらまたガキ共と野球やる。

「失礼しまーす」

「おーおー、よくきてくれたな。

まあ座ってくれ」

「はい」

緑茶を出された。

うむ、美味である。

「でな、君に機動六課転属の話が……」



あんたもそれか。  
皆機動六課機動六課うるせえんだよ。

「入る気はありません。  
別を当たってください」

「む、そうか……」。

……そうだ、チエスでもやらないか？」

ま、いい暇潰しになるか……」。

誰もいない隊舎の屋上のベンチでは、寝そべって制服のブレザーを  
かけて寝ている俺がいた。  
時期は2月下旬、もうすぐ日差し暖かな春が来る。

「やっと見つけた！」

魔王 が あらわれた !  
死神 が あらわれた !

誠 は にげだした !  
しかし まわりこまれてしまった !

3人のバインドを受けた俺は、俺と魔王一行以外に誰もいない屋上  
の真ん中で正座させられた。

逃げないからバインド外してよ。

「何で逃げるのかな？」

それはあなたがたが鬱陶しいからです。

「なのは、時間もないし、取り敢えず連れて行くっ？」

拉致ですか。

局員が犯罪してどうすんのさ。

これ聞いたらきつとうちのトップのレジアス中將が黙ってないぞ。  
後で報告書に書いてやる事を決めた瞬間である。

で、連れてこられたのは次元航行艦“クラウディア”。

酷いもんでした。ええ酷いもんでしたよ。

軽く首にバインドされて何かと思ったらバインドで首輪されてたんだから。いやマジで。

おかげで周りからの視線が冷ややかどころか存在してないみたいな感じだったし。

「クロノ君、入るよー？」

どこだこー。

扉が開くと、主に顔がガキ臭い野郎がいた。  
だからガキは嫌いだって。

「久しぶりだね、お兄ちゃん」

「だからこんな場所でお兄ちゃんは止めると言っているだろう!! 今日三雲陸曹もいるんだぞ!!?」

童顔の癖に妹に「お兄ちゃん」と呼ばせるとかけしからん。つか替わってください。

「よう来たなーなのはちゃん、フェイトちゃん。三雲陸曹もお疲れさんな?」

「「はやて(ちゃん)!!」」

いたのか狸。

狸の隣に魔王と死神が座る。相変わらず狸と童顔がセンターか。

「三雲陸曹も座ってくれ」

「いえ、自分は結構です。」

あとバインド外してください」

おっ、外れた。

「すまないね、妹とその友人が迷惑をかけた」

いい加減にしてほしいです。てか誰だおめえ。

「クロノ・ハラオウンだ。  
階級は提督。」

この次元航行艦の艦長をやってる。  
よろしく、三雲陸曹」

「あ、よろしくお願いします。」

自分は三雲誠と言います。

階級は陸曹です」

俺は嫌いな奴以外には礼儀を重んじる人間だと思っている。

あの3人？

大嫌い。

だってしつこいし。

なんだかんだ言って、階級さえあまり違わなければクロノ提督とは  
良い友人になれたかもしれない。

「さて、話を始めよう。」

今日読んだのは「機動六課の話でしょう？」「そうだ。」

3人曰く、機動六課には君の力が必要らしい。

僕も君の経歴や資格の数を見て、はやて達が喉から手が出る程欲し  
くなる理由もわかる」

確かに経歴や資格の数は凄いいよね。

執務官資格を持っているだけで凄いつてのに教導官資格やらデバイ  
スマイスターやら持つてるし。

昔はテロ組織追わされたり人質殺傷事件を解決させられたりばかり  
だったしな。

そういうジャンルの事件の検挙率は管理局トップなんじゃあるまいかと思いたくなる。

「何度言っても無駄です。

自分は、機動六課には行きません。

今の職場で満足です」

行っただって面白味なさそうだし、噂だと女ばかりだとか。

女性は好きだが苦手。接し方が無理ゲー。

「何でや！

周りが女だらけやからハーレム状態でウツハウハやないか！

セクハラし放題やで!？」

「はやてちゃん……」

誰がセクハラなんてするか。

狸、お前はもう黙ってる。

ほら魔王が呆れてるぞ。

「はやて、冗談は程々に、ね?」

「冗談のつもりじゃないんやけどなあ……」

「「「はあ……」」」

この狸、マジだったのか。

「失礼しましたー」

全員にガツされた。

「と、ともかく！

三雲陸曹、機動六課に入ってくれないか？」

「嫌です。

第一、こんな不謹慎な勧誘をしておいて入る人間ではないので」

クロノ提督も、「確かに……」という顔をしている。

「しかし、彼女等の部隊には君が必要なんだ！

頼む、この通りだ！」

「えっ」

まさか土下座されるとは思わなんだ。

「フェイト、なのは、はやて、お前達も地に膝つけて頭を下げるんだ」

そのこの3人も言われた通り土下座する。

上官に土下座させるのがこんなに気持ち良いものとは思ってなかったぜ……。

クロノ提督に悪いのでそろそろ顔をあげてもらおう。

「提督、顔をあげてください。

提督が頭を下げておっしゃるなら、行かないわけにはいきません」

「ありがとう。」

君には迷惑をかけてすまないな」

顔をあげた提督はそう口にした。

「いえ、気にはしていません。

提督もお気になさらず」

エースな3人はその後ろでキヤーキヤー騒いでる。

問題はお前達だよお前達。

今度からまとめて3バカと呼ぶことにするか。うん、そうしよう。

「君が気にしなくても知り合いである僕が気にするんだ。

知り合いが迷惑をかけたんだ。

彼女等の知り合いとして、尻拭いをさせてくれ」

差し出してきたのはクラナカンで有名なスイーツバイキングの割引券だった。

「任務から帰ってきたばかりだから午後は暇でね……甘いのが好きだと聞いていたので、良かったらスイーツバイキングに行かないか？君とは色々と話がしてみたい」

「喜んでお供させていただきます」

つかクロノ提督すげえ。

甘いのが好きだとよく知ってるな。

そのあと、クロノさんと男2人でケーキを貪りながら駄弁ってた。気づいたらあの人は話に花が咲いて友達並みの関係になっていたのだ！

これは嬉しい限りである。

「ただいま戻りましたー」

「何してたんですか？」

ゆとりが出迎えてくれた。

てか挨拶すらないのかお前。

「提督に土下座させてきた」

「……は？」

今はそのゆとりに構ってる暇はない。

俺は早く奥で人形焼きを食べたいんだ！

俺が扉を開けた瞬間だった。

「おお、お帰り。

どうだった？

機動六課に行く気になったか？」

テメーの仕業かクソジジイ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2848ba/>

---

我が道突き進む！スパイラルなんだとっ！？.....突き進める自信をなくしたと

2012年1月9日01時55分発行